

吉原遺跡、松原経塚

—柏御坊線交通安全施設等整備事業に伴う発掘調査報告書—

2024年3月

公益財団法人 和歌山県文化財センター



1. 遺跡遠景（北西から）



2. 015・023～025 方形周溝墓（上空から）

序

日高郡美浜町に所在する吉原遺跡、松原経塚は、日高川河口右岸に形成された海岸砂丘上に位置します。この海岸砂丘上には近畿最大の松林である「煙樹ヶ浜」が広がり、その南東端付近に遺跡が所在しています。吉原遺跡は過去の調査で、弥生時代から近世にかけての墓地であることが明らかにされており、多くの土壙墓や方形周溝墓、供獻された土器などがみつかっています。

このたび、和歌山県の委託を受けて柏御坊線交通安全施設等整備事業に伴い、吉原遺跡、松原経塚の発掘調査を実施しました。調査では、弥生時代中期から弥生時代後期末頃の方形周溝墓や奈良時代の火葬墓などの遺構がみつかりました。方形周溝墓は、墳丘に石を積み上げていたことが想定でき、当地域では見られない構造です。このような墓は、播磨地域や近畿北部・山陰地方などに類例を見出すことができ、当該地域の墓制や地域間交流を考えるうえで貴重な発見となりました。

ここに、発掘調査の成果をまとめ、報告書を刊行いたします。本書が郷土の歴史を知る上で一資料となれば幸いと存じます。

最後となりましたが、発掘調査ならびに報告書作成に当たり、ご指導・ご協力をいただきました関係各位の皆様方に深く感謝申し上げるととともに、今後とも当文化財センターへの一層のご理解とご支援を賜りますようお願いします。

令和6年3月

公益財団法人和歌山県文化財センター
理事長 櫻井敏雄

例　　言

1. 本書は、日高郡美浜町に所在する吉原遺跡・松原経塚の発掘調査報告書である。
2. 調査は、柏御坊線交通安全施設等整備事業に伴うものであり、令和4・5年度に発掘調査業務を、令和5年度に報告書作成に伴う出土遺物等整理業務を実施した。
3. 発掘調査業務及び出土遺物等整理業務は、和歌山県の委託を受け、和歌山県教育委員会（以下、「県教育委員会」という。）の指導のもとに、公益財団法人和歌山県文化財センター（以下、「当文化財センター」という。）が実施した。
4. 発掘調査業務・出土遺物等整理業務の調査組織は下記の通りである。

| 【令和4年度】 | | 【令和5年度】 | |
|--------------|-------|---------|--|
| 事務局長（管理課長兼務） | 平林 照浩 | 平林 照浩 | |
| 埋蔵文化財課長 | 高橋 智也 | 高橋 智也 | |
| 発掘調査業務担当 | 川崎 雅史 | 川崎 雅史 | |
| 出土遺物等整理業務担当 | 川崎 雅史 | 川崎 雅史 | |

5. 本書の執筆は主に川崎がおこない、付章のみを丸山真史（東海大学）が執筆した。編集は川崎がおこなった。
6. 発掘調査業務及び出土遺物等整理業務で作成した実測図・写真・台帳などの記録資料は、当文化財センターが、出土遺物は県教育委員会が保管している。
7. 発掘調査業務及び出土遺物等整理業務に際し、下記の方々や団体からご協力を得た。記して感謝を表します。

網伸也 狹川真一 田中元浩 長友朋子 森岡秀人 和田晴吾 渡瀬敏文

美浜町教育委員会

凡　　例

1. 発掘調査及び出土遺物等整理業務は、『財団法人和歌山県文化財センター発掘調査マニュアル（基礎編）』（2006. 4）に準拠しておこなった。
2. 調査ならびに本書で使用した座標値は、平面直角座標系（平成14年国土交通省告示第9号）第VI系であり、値m単位で使用している。図面に使用している北方位は座標北で、標高は東京湾標準潮位（T.P.+）の数値である。
3. 土色は、農林水産省農林水産技術会事務局監修「新版標準土色帖」（2018年版）に準じ、土質は調査担当者の任意の判断でおこなっている。
4. 調査区名・遺構番号は、基本的に発掘調査時のものを踏襲し、遺構番号は種別に関わらず1からの通し番号である。また、遺物番号も種類等に関わらず1から通し番号を付している。
5. 調査で使用した調査コード22-25・010、012（2022年度—美浜町・吉原遺跡・松原経塚）で、記録資料はこのコードを用いて管理している。

本文目次

序・例言・凡例

| | |
|----------------------|----|
| 序・例言・凡例 | |
| 第1章 環境 | 1 |
| 第1節 地理的環境 | 1 |
| 第2節 歴史的環境 | 1 |
| 第2章 調査の経緯と経過 | 5 |
| 第1節 既往の調査 | 5 |
| 第2節 調査に至る経緯 | 6 |
| 第3節 発掘調査業務の経過 | 6 |
| 第4節 出土遺物等の資料整理 | 7 |
| 1. 応急遺物整理 | 7 |
| 2. 出土遺物等整理業務 | 7 |
| 第5節 現地説明会・現地見学 | 7 |
| 1. 現地説明会 | 7 |
| 2. 現地公開 | 7 |
| 第6節 現地指導 | 7 |
| 第3章 調査方法 | 8 |
| 第1節 地区割 | 8 |
| 第2節 調査手順 | 9 |
| 第3節 記録 | 9 |
| 第4章 調査内容 | 10 |
| 第1節 基本層序 | 10 |
| 第2節 検出した遺構と遺物 | 10 |
| 1. 方形周溝墓 | 10 |
| 2. 土坑 | 18 |
| 3. 火葬墓 | 22 |
| 第5章まとめ | 23 |
| 第1節 砂丘上の墓地 | 23 |
| 第2節 方形周溝墓 | 24 |
| 第3節 火葬墓 | 25 |
| 第4節 松原経塚 | 25 |
| 付 章 吉原遺跡、松原経塚で出土した人骨 | 27 |
| 報告書抄録 | 28 |
| 写真図版 | |

表目次

| | |
|------------|----|
| 表1 出土遺物観察表 | 26 |
|------------|----|

挿図目次

| | | | |
|-----------------|-------|------------------|----|
| 図1 遺跡の位置 | 1 | 図9 015方形周溝墓（2） | 16 |
| 図2 周辺の遺跡 | 2 | 図10 023～025方形周溝墓 | 17 |
| 図3 既往の調査 | 5 | 図11 遺構図（土坑）1 | 19 |
| 図4 地区割 | 8 | 図12 遺構図（土坑）2 | 20 |
| 図5 調査区全体図・断面図 | 11・12 | 図13 019火葬墓 | 21 |
| 図6 004・007方形周溝墓 | 13 | 図14 出土遺物 | 22 |
| 図7 011方形周溝墓 | 14 | 図15 吉原遺跡の墓域の変遷図 | 23 |
| 図8 015方形周溝墓（1） | 15 | 図16 吉原遺跡の方形周溝墓 | 25 |

写真目次

| | | | |
|----------------------------------|---|----------------------------|----|
| 写真1 堅田遺跡・弥生時代前期の環濠集落 | 2 | 写真8 現地説明会の開催状況 | 7 |
| 写真2 岩内3号墳 主体部遺物出土状況 | 3 | 写真9 ラジコンヘリコプターによる航空写真撮影・測量 | 9 |
| 写真3 堅田遺跡・日高郡衙跡 | 4 | 写真10 基本層序 | 10 |
| 写真4 道成寺創建期の瓦（拓本）と小松原II遺跡出土の瓦（写真） | 4 | 写真11 平成28年度調査029列石状遺構 | 24 |
| 写真5 亀山城跡と湯川氏館跡 | 5 | 写真12 昭和63年度調査SX-002 | 24 |
| 写真6 発掘調査状況 | 6 | 写真13 昭和63年度調査SX-003 | 24 |
| 写真7 遺物実測状況 | 7 | 写真14 火葬人骨 | 27 |

図版目次

| | | |
|------|--|---|
| 巻頭図版 | 1. 遺跡遠景（北西から） 2. 015・023～025方形周溝墓（上空から） | 3. 007方形周溝墓周溝部断面（南西から） 4. 011方形周溝墓南西部（南西から） |
| 図版1 | 調査区全景（上空から） | 5. 011方形周溝墓南東部（南西から） 6. 015方形周溝墓当初の石積み（南から） |
| 図版2 | 1. 調査区近景（南西上空から） 2. 調査区南東部の遺構（上空から） | 7. 015方形周溝墓北辺部石積み（北から） 8. 015方形周溝墓北辺部落石状況（南西から） |
| 図版3 | 1. 004・007方形周溝墓、005土坑（北東から） 2. 004方形周溝墓、005・006土坑（北西から） | 図版9 1. 002・003土坑（上空から、上が北東） 2. 013土坑（上空から、上が南西） 3. 012土坑（南西から） |
| 図版4 | 1. 009・010土坑（北から） 2. 011方形周溝墓（西から） | 4. 019火葬墓 検出状況（南東から） 5. 019火葬墓 蔵骨器検出状況（南東から） |
| 図版5 | 1. 015方形周溝墓（上空から） 2. 015・023方形周溝墓（北西から） | 図版10 1. 019火葬墓 蔵骨器骨灰除去後（南東から） 2. 019火葬墓 墓室（南東から） 3. 火葬人骨 |
| 図版6 | 015方形周溝墓（北西から） | 図版11 出土遺物 |
| 図版7 | 1. 023～025方形周溝墓（北西から） 2. 023方形周溝墓（北東から） | |
| 図版8 | 1. 004・007方形周溝墓周溝部断面（南西から） 2. 004・007方形周溝墓周溝部断面（北西から） | |

第1章 環境

第1節 地理的環境（図1）

美浜町は紀伊半島の西海岸を占める和歌山県の中部に位置しており、東は御坊市、北は日高町に接し、西・南は太平洋に面している。町域の北西側には標高328mの西山をピークとする山塊があり、西方の日ノ御崎に向かって下り海に没している。東側は日高川が形づくった日高平野の一画を占め、その東端を西川が流れ、河口部で日高川に合流する。日高川河口から日ノ御崎に向かう海岸は煙樹ヶ浜と呼ばれ全長約4.5km、幅約0.5kmの砂丘が形成されている。砂丘上のクロマツ林は、初代紀州藩主の徳川頼宣が植林したものと伝えられる。松林の規模は近畿一とされ、煙樹ヶ浜とともに「煙樹海岸県立自然公園」の中核を占める。市街地と主要な公署は砂丘上に立地し、西川と砂丘の間は後背湿地となり、田地の多くはここに集中している。

昭和29年に松原・和田・三尾の3村が合併して美浜町となり、面積は約12.8km²と県下で2番目に狭い町である。町のおもな産業は農業と漁業で、農業では水稻と施設での野菜・花き栽培等の複合経営が主流をなしている。漁業は紀伊水道と太平洋の合流海域が主な漁場で、好漁場に恵まれていることから古くから盛んに行われてきた。煙樹ヶ浜で行われる伝統漁法である地曳網では、シラスが水揚され、その加工なども行われている。ただ、農漁業とも高齢化が進み、新しい振興の方策が検討課題となっている。

海岸砂丘は現地形で見る限り、堤防低地を走る県道を境に新旧2時期を看取できる。吉原遺跡は新しい砂丘の南東部に位置し、砂丘稜線に沿うように長さ約500m、幅120mの範囲に展開している。



図1 遺跡の位置

第2節 歴史的環境（図2）

吉原遺跡、松原経塚が所在する日高平野は、沖積平野では和歌山平野に次ぐ県内2番目広さで、美浜町のほか御坊市、日高町、日高川町にまたがる。このため、当遺跡の歴史的環境を語るうえで、それらの市町村に所在する遺跡も重要であることから、必要に応じて美浜町以外の遺跡についても触ることにする。

旧石器時代 美浜町内では、この時期に遡る遺跡は確認されていない。周辺では、日高川町の河岸段丘上に位置する松瀬遺跡や、日高川以南の海岸段丘上に位置する御坊市尾ノ崎遺跡や壁川崎遺跡などがあり、剥片石器やナイフ形石器、細石刃などが発掘調査や採集遺物として確認されている。和歌山市南東部から旧貴志川町にかけての地域、有田川町藤並地区遺跡周辺などとともに、県下では最も古くから人々が生活していた地域として周知されている。

縄文時代 日高川以南の段丘上には、尾ノ崎遺跡や御坊市中村I・II遺跡などがあり、前期の土器や石器が出土している。日高川が形成した河岸段丘上の日高川町和佐遺跡や松瀬遺跡でも早

期から晩期の土器が出土しており、なかでも和佐遺跡周辺では、採集された多くの遺物から、継続して集落が営まれていた可能性がある。後期以降になると沖積平野でも生活が営まれるようになり、美浜町田井遺跡（15）や御坊市小松原Ⅰ・Ⅱ遺跡（23）などがある。田井遺跡は昭和14年と平成19年に発掘調査が行われ、後期から晩期にかけての土器類や石器、玉類などが出土している。

弥生時代 弥生時代の遺跡は、水田が管理しやすい平野部に集中するようになる。古い時期の日高川が形成した自然堤防（微高地）上には、上游部より日高川町法徳寺遺跡、御坊市東郷遺跡・津井切遺跡・富安Ⅰ遺跡・小松原Ⅱ遺跡（25）・蛭田坪遺跡（27）・堅田遺跡（28）などが繋がるように立地する。このうち、堅田遺跡では3重の環濠を巡らした前期の集落（写真1）が確認されており、日本最古とされる青銅器の鋳型（ヤリガンナ）が出土地した。中期前葉の集落は明らかでないが、墓地遺跡である吉原遺跡では土壤墓が築かれるようになる。中期中葉から後葉にかけては、沖積平野部の集落は活況を呈するようになり、東郷遺跡・富安Ⅰ遺跡・小松原Ⅱ遺跡・堅田遺跡などが発掘調査され、遺構・遺物の豊富さから中心的な集落になると考えられる。この時期の美浜町の集落遺跡は明らかでないが、吉原遺跡は墓地として活発に使用される。中期末頃になると平野部に展開していたほとんどの集落は活動を止め、それと整合するかのように平野部を見下ろす山の上に高地性集落が営まれ、御坊市亀山遺跡などがある。亀山遺跡の集落は後期中頃まで続いているが、その後、再び平野部で集落が形成されるようになり、古墳時代に継続する。この時期は美浜町内でもいくつかの



写真1 堅田遺跡・弥生時代前期の環濠集落
(御坊市教育委員会提供)



遺跡が確認されており、吉原遺跡が立地する砂丘の後背地に田井・西川遺跡（16）や堂ノ前西沼遺跡（13）などがあり、遺構は明らかになっていないが低地に集落が形成されていたと考えられる。また、吉原遺跡では途絶えていた墓地が再開される。

農耕祭祀に使用されたとされる銅鐸は、平野部周辺で7個確認されており、県下で最古段階に位置づけられる外縁付鉢2式銅鐸が小松原II遺跡の近くで、扁平鉢式銅鐸3個が亀山遺跡の一画で発見されている。また、亀山遺跡の北側に位置する日高町向山からは突線鉢3式銅鐸2個が、東郷遺跡の近くの日高川町鐘巻からは県下最大の突線鉢5式銅鐸が出土している。

古墳時代 前期の遺跡に関しては、弥生時代から継続するものが多く、周辺に広く展開するようになる。東郷遺跡では前期初頭に水路の掘削など大規模な開発が行われる。また各地域からの搬入土器が多く出土することからも活発に他地域と交流していたことが窺え、この時期の日高平野における中心的な集落であったと考えられる。古墳時代中・後期の集落としては富安I遺跡や東郷遺跡・津井切遺跡（22）などがあるが、前期の遺跡ほどの広がりは確認できていない。

古墳は日高川右岸では日高平野北側の丘陵上・丘陵裾や海岸砂丘上に、左岸では海岸段丘上やその背後の山上に集中している。

前期末から中期に位置づけられる古墳としては、日高平野北側では鏡・玉類・刀剣類が出土した御坊市阪東丘1・2号墳がある。御坊市鳳生寺山古墳群は古式須恵器や滑石製品が副葬され、西麓に位置し同様な遺物が出土する富安I遺跡との関係が注目される。日高川の南では御坊市岩内3号墳（36-3、写真2）が中期古墳として挙げる事ができる。また、尾ノ崎遺跡の方形周溝墓群は古墳時代前期初頭から中期初頭にかけて造営され、前方後方形の周溝墓も存在する。また、吉原遺跡でも弥生時代後期末頃から古墳時代にかけて方形周溝墓や土壙墓が築かれる。

古墳時代後期になると竪穴式石室や横穴式石室を内部主体とする多くの古墳が築かれ、各所に古墳群を形成する。当地域最大の古墳群の盟主墳である御坊市天田28号墳（43-28）は、紀の川流域以外では数少ない埴輪を持つ前方後円墳である。御坊市中村1号墳は、一つの墳丘に竪穴式石室と土壙2基を主体部に持ち、礫を敷いた土壙からは製塩土器などが出土する。美浜町でも、後期に属する古墳が多く、入山古墳群（17）、和田古墳群（7）、本の脇古墳群（5）などが築かれる。

終末期の古墳には、方墳の御坊市岩内1号墳（36-1）がある。地方では珍しい漆塗木棺や銀装大刀が出土し、築造時期や遺物内容から有間皇子の墓とする説もある。また、周辺では横穴式石室への追葬例がこの時期以降も確認できる。

古墳時代の須恵器を焼成していた窯跡としては、御坊市富安I窯跡がある。6世紀後半代から7世紀にかけて操業された窯跡で、2基の登窯が小谷部に並列していた。このうち1号窯は残存状態が良好で、窯体は地面をトンネル状にくり抜いて築造していることが明らかになっている。



写真2 岩内3号墳 主体部遺物出土状況
(御坊市教育委員会提供)

弥生時代後期末から古墳時代にかけては、海岸線で製塩遺跡が確認されており、美浜町では三尾遺跡、水敷遺跡などがある。

古代～中世 古代の日高川下流域は日高郡に属し、この地域に財部・内原・岩淵の3つの郷を比定することができる。当時の郡役所である日高郡衙は、堅田遺跡周辺に存在したことが発掘調査で明らかにされている（写真3）。調査では規則正しく配置された大規模な掘立柱建物群が検出され、硯や墨書き土器なども見つかっている。また、小松原II遺跡では、大きな掘形をもつ掘立柱建物や硯などが見つかっており、役所などの存在を考えることができる。堅田遺跡にあった郡衙が奈良時代後半には廢絶していることや、小松原II遺跡で奈良時代から平安時代の遺物が出土することから、郡衙が小松原II遺跡周辺に移動した可能性も考えられる。また、古代寺院としては白鳳期創建とされる道成寺があり、現在まで連綿と法灯を伝えている。小松原II遺跡では、道成寺の創建時の瓦と同形式の白鳳瓦が出土しており（写真4）、『日本靈異記』の説話に郡衙近くの寺として登場する「別寺」が付近にあった可能性がある。古代の火葬墓は日高川町の道成寺周辺で、船田火葬墳墓、地蔵寺山墳墓、池田谷墳墓が確認されており、仏教の影響を受けた埋葬形態であることからも、道成寺の僧侶に関わる墓である可能性が考えられる。美浜町では吉原遺跡が、古代以降も墓地として利用され、火葬墓や土壙墓がつくられる。

財部郷からは「調」として塩を貢納していたことが平城宮跡出土の木筒より窺うことができる。岩内II遺跡では倉を含む9棟の掘立柱建物が検出されており、硯の出土などからも、岩淵郷の郷家などの可能性も考えられる。

古代の須恵器窯としては、富安I窯跡から継続するように7～8世紀にかけて操業される御坊市富安II窯跡や8世紀のみ操業される御坊市猪野々窯跡がある。

平安時代前・中期の当地域の様子を窺う資料は少ないが、後期になると荘園がつくられるようになり、富安荘・蘭財荘・日高荘があったことが文書資料から窺うことができる。また、上皇による熊野御幸が行われるようになり、その後、貴族や一般庶民までも熊野信仰が浸透し、参詣道には王子社が設けられる。松原王子神社は海の参詣道のうち、比井王子から熊野参詣道の紀伊路に繋がる道沿いに位置し、その参詣道が吉原遺跡付近を通過している。松原経塚（12）も熊野信仰に関わる遺跡である可能性もある。

南北朝時代に北朝方として活躍した湯河氏は、足利幕府の奉公衆として、御坊市湯川氏館跡（25）や亀山城を拠点として室町時代末頃には、日高地方をはじめ牟婁・有田地方まで勢力を



写真3 堅田遺跡・日高郡衙跡
(御坊市教育委員会提供)



写真4 道成寺創建期の瓦（拓本）と小松原II
遺跡出土の瓦（写真）

拡大するが、天正13年（1585）の羽柴秀吉の紀州攻めにより衰退する。美浜町では入山城跡や本の脇城跡（4）などが戦国時代の城であると考えられる。吉原御坊（14）は御坊市の名前の由来にもなっている日高別院の前身で、湯河氏が創建した寺院で堀や土塁をもつ城郭寺院でもあったと伝えられており、現在の松見寺がその跡地である。



写真5 亀山城跡と湯川氏館跡

第2章 調査の経緯と経過

第1節 既往の調査（図3）

吉原遺跡は不時発見された土器類や発掘調査によって弥生時代から江戸時代にかけての墓域として知られている。吉原遺跡の主要な既往調査としては、当文化財センターによって実施された昭和62・63年度（1987・1988）の調査、平成28年度（2016）の調査、令和2年度（2020）の調査がある。昭和62・63年度の調査は、県道柏御坊線改良工事に伴うもので、調査面積は延べ3,300m²である。調査では、弥生時代中期から古墳時代初頭にかけての方形周溝墓や土壙墓、奈良時代から平安時代の土壙墓、時期不詳の溝状遺構や小穴などが確認されている。平成28年度の調査は、美浜町が実施する都市防災総合推進事業に伴うもので、調査面積は406.2m²である。調査では、奈良時代から平安時代の土坑、古代以前の列石状遺構、中世から近世の火葬墓が確認されている。令和2年度の調査は、新浜集会場新築工事に伴うもので、調査面積は720.6m²である。調査では、弥生時代の土器埋納遺構、溝、土坑、古墳時代の土器埋納遺構が確認されている。

松原経塚については、工場敷地を造成した時に土器や鏡が発見されたが、その後、調査は行われていない。



図3 既往の調査

第2節 調査に至る経緯

和歌山県道188号柏御坊線は、日高郡日高町志賀から美浜町を経て御坊市蔦を結ぶ実延長11.036kmの一般県道である。その沿線の美浜町吉原地内で、和歌山県が交通安全施設整備事業を実施することになった。事業対象地は、周知の遺跡である吉原遺跡、松原経塚の範囲内で、昭和62年度に実施された県道改良工事で弥生時代の土壙墓などが検出された箇所に隣接し、工事対象地にも遺構の展開が予想されることから、記録保存調査が必要であると判断された。

以上のことから、令和4年7月14日付け日建道第07140001号で和歌山県知事から県教育委員会に吉原遺跡、松原経塚の発掘調査の依頼があった。これを受けて令和4年7月20日付け文第07190005号で県教育委員会から当文化財センターに実施計画書の提出依頼があった。当文化財センターは令和4年8月4日付け和文セ第130号で実施計画書を提出し、令和4年8月29日付けで和歌山県と当文化財センターとの、柏御坊線交通安全施設等整備事業に伴う吉原遺跡、松原経塚発掘調査業務の委託契約を締結した。

第3節 発掘調査業務の経過

現地調査に先立ち、発掘調査は「柏御坊線交通安全施設等整備事業に伴う吉原遺跡、松原経塚発掘調査工事」として、令和4年11月14日から令和4年12月26日までの工期でスギタニに再委託した。また、航空撮影及び基準点測量は、「柏御坊線交通安全施設等整備事業に伴う吉原遺跡、松原経塚発掘調査に係る航空写真測量委託業務」として、令和4年10月19日から令和5年1月31日の契約期間で和歌山航測株式会社に再委託した。発掘調査面積は369.6m²である。

調査において重要遺構が発見されたことや、その保存方法についての協議に日数を要したことから、発掘調査工事は令和5年3月14日まで、航空写真測量委託業務は令和5年2月28日まで工期の延長を行った。また、和歌山県と当文化財センターとの契約期間についても、令和5年4月28日まで延長した。



写真6 発掘調査状況

第4節 出土遺物等の資料整理

1. 応急遺物整理

調査で出土した遺物は、時期決定を行うとともに調査方法の判断資料とするため、また、現地説明会等で公開することを目的として、発掘調査に並行して岩橋整理事務所において遺物洗浄を実施した。このほか、図面・写真整理等も行っている。



写真7 遺物実測状況

2. 出土遺物等整理業務（写真7）

報告書作成に伴う整理業務は、和歌山県の委託を受けて「柏御坊線交付金交通安全事業に伴う吉原遺跡、松原経塚出土遺物等整理業務」として令和5年5月30日から令和6年3月8日までの契約期間で実施した。発掘調査で出土した遺物収納コンテナ（28ℓ）4箱を対象とし、遺物の注記、登録、接合・補強、復原をおこなうとともに、遺物実測図作成・トレース作業、遺構図のトレース作業を実施した。その後、遺物写真の撮影をおこない、発掘調査で撮影した遺構写真及び遺物・遺構図のトレース図とともに組版をおこなった。また、遺物観察表を作成し、一連の作業を踏まえ原稿執筆と編集作業をおこない報告書を刊行した。

第5節 現地説明会・現地見学

1. 現地説明会（写真8）

調査もほぼ終了した令和4年12月17日（土）に現地説明会を実施した。当日は弥生土器や火葬墓の蔵骨器である須恵器などの出土遺物の展示もおこなった。小雨模様の天気であったが地元区民を中心に、県外からの参加もあり、参加者は30名であった。



写真8 現地説明会の開催状況

2. 現地公開

発掘調査で大きな成果があったことから、町内の教育関係機関からの見学があった。

- ・令和4年12月9日（金） 美浜町文化財保護審議委員 7名
- ・令和4年12月20日（火） 美浜支援学校 9名

第6節 現地指導

県内では初例となる石積みをもつ方形周溝墓が検出されたことから、その評価をおこなうため弥生時代・古墳時代を専門とする森岡秀人氏（古代学協会客員研究員 奈良県立橿原考古学研究所共同研究員）に現地に於いて調査指導を仰いだ。

第3章 調査方法

第1節 地区割（図4）

遺構実測図作成や遺物取り上げの際に用いた地区割の基準線は、平面直角座標系（平成14年国土交通省告示第9号）世界測地系第VI系の座標軸を使用した。本来は、遺跡の範囲を網羅する北東隅の区切りの良い数値を地区割の基点とすることになっており、その地区割と同じ遺跡の調査で踏襲することになっているが、平成28年度調査と令和2年度調査の地区割の基点は異なっていた。このため、今回の調査では、調査区が隣接する令和2年度の地区割を踏襲し、 $X=-233,300m$ 、 $Y=-77,900m$ を地区割の基点とした。この基点から、西方向および南方向に各々100m毎に区切った区画を1単位とした大区画を設定し、基点から西方向へ大文字アルファベットでA～Yと、南方向へアラビア数字で1～25と表記した。さらに大区画の中で4m四方の区画を1単位とした小区画を設定し、北東端を基点とし西方向へアルファベット小文字でa～yと、南方向へアラビア数字で1～25と表記した。遺構実測図作成や遺物取り上げの際には原則として、4m四方の小区画で行い、大区画と小区画を組み合わせて表記した（例：J 8 e15）。今回の調査区は、大区画でJ 8・J 9・K 8の範囲内に相当する。

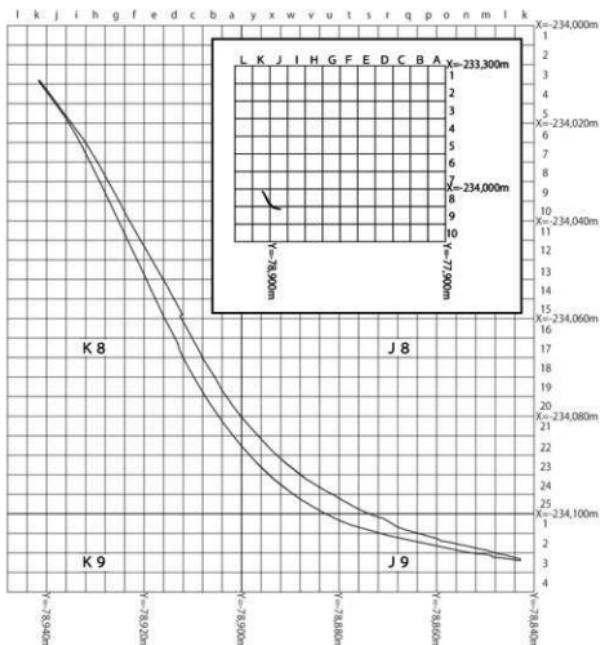


図4 地区割

第2節 調査手順

発掘調査では、表土等を重機を使用して掘削を行い、その後、遺物包含層以下を人力で掘削し、遺構の検出・掘削を行っている。排土はすべて横置きした。調査については、当文化財センターの定めた『発掘調査マニュアル（基礎編）』（2006.4）に準拠して実施している。

発掘調査で使用した調査コードは、22-25・010、012（2022年度一美浜町・吉原遺跡、松原経塚）である。出土遺物、記録資料（図面、写真等）はこの調査コードを用い管理している。

第3節 記録

遺構番号は調査区ごとに種類にかかわらず通し番号とし、時代にかかわらず検出した順に番号を付している。

出土遺物は、大区画一小区画を取り上げ区画とし、遺構・層位別に取り上げている。

記録は写真撮影と図面作成を行った。

写真撮影については、全景写真のほかに検出した遺構のうち主要な遺構の個別写真・遺構断面、調査区壁面などについて行っている。撮影にはフルサイズデジタルカメラを使用し、作業用足場などからも撮影している。また、これらと別に測量業務委託でラジコンヘリコプターを利用して、航空写真撮影をおこなっており（写真9）、垂直全体写真、垂直部分写真、周辺部を含めた斜め写真を撮っている。航空写真撮影は当初1回であったが、重要遺構（015方形周溝墓）が発見されたことから、015方形周溝墓を中心とした段階的な状況写真を2回追加している。同時に航空写真測量も第1回の全体測量以外に、015方形周溝墓周辺を対象に2回追加して実施している。

図面作製については、一部を除く各遺構面の全体図を測量業務委託で航空写真測量を利用して図化（S=1/50）しているのをはじめ、遺構配置図（S=1/100）、調査区壁面土層図（S=1/20）、主要な遺構平面図・断面図（S=1/10・1/20）などを実測により作成している。



写真9 ラジコンヘリコプターによる
航空写真撮影・測量

第4章 調査内容

第1節 基本層序（写真10）

調査地における基本層序は以下である。

- 第1層 表土・腐植土
- 第2層 10YR4/1褐灰 細砂・粗砂 土分あり
1cm前後の礫を含む
- 第3層 2.5Y3/1黒褐 細砂・粗砂 土分あり
1~2cmの礫を多く含む
- 第4層 2.5Y4/1黄灰 細砂・中砂 土分あり
部分的に硬化する
- 第5層 10YR4/2灰黄褐 細砂 土分少しあり
- 第6層 2.5Y5/2暗灰黄 細砂 土分なし

すべての層位が揃うのは調査区の中央付近で、北西及び南東に向かっては第2~第5層で欠落する層

位があり、遺構検出面も浅い。このうち第2・3層が近・現代の層位で、一時期の表土として形成されたものである。第4層は風成堆積した層位で、近世以降と捉えることができるが遺物はほとんど含まない。第5層には弥生時代から古代の土器片が少量含まれる。遺構検出は基本的に第6層上面で行った。

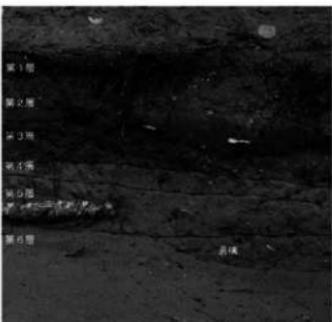


写真10 基本層序

第2節 検出した遺構と遺物

調査区の微地形は、中央付近の標高が最も高く、砂丘稜線に位置すると考えられる。北西側・南東側に徐々に下っており、主要な遺構は中央付近の稜線から北西側・南東側にわずかに下った位置で検出している。

検出した遺構には弥生時代中期と弥生時代後期末の方形周溝墓を7基、土坑、奈良時代の火葬墓1基などがある。調査区が狭小であることから、全容が明らかになった遺構は少なく、ほとんどの遺構は、その一部を検出した程度である。

また、遺構や包含層などからは弥生土器、須恵器のほか黒色土器が出土している。

1. 方形周溝墓

004方形周溝墓（図6・14、図版2・3・8・11） 南東側に下る位置で検出した。007方形周溝墓とほぼ同じ位置で重複し、それより古い。また、南側で009・010土坑と重複し、それより新しい。東側が調査区域外となるため、約2/5を検出したのに留まる。墳丘の軸方向は東西・南北軸に対して45度振っている。規模は墳丘部が一辺6.20mで、周溝は幅1.20~1.60m、深さ0.15~0.35mである。周溝部の断面形状は船底状で、埋土には10~20cmの扁平な礫が多く含まれる。遺物は弥生時代中期前葉頃の壺（1~3）などが出土しており、検出した方形周溝墓のなかでは唯一弥生時代中期に帰属すると判断している。主体部は検出できていない。

007方形周溝墓（図6、図版2・3・8） 004方形周溝墓と重複し、それより新しい。検出時には、004方形周溝墓の南辺周溝部に重複する溝状遺構と考えていたが、004方形周溝墓の

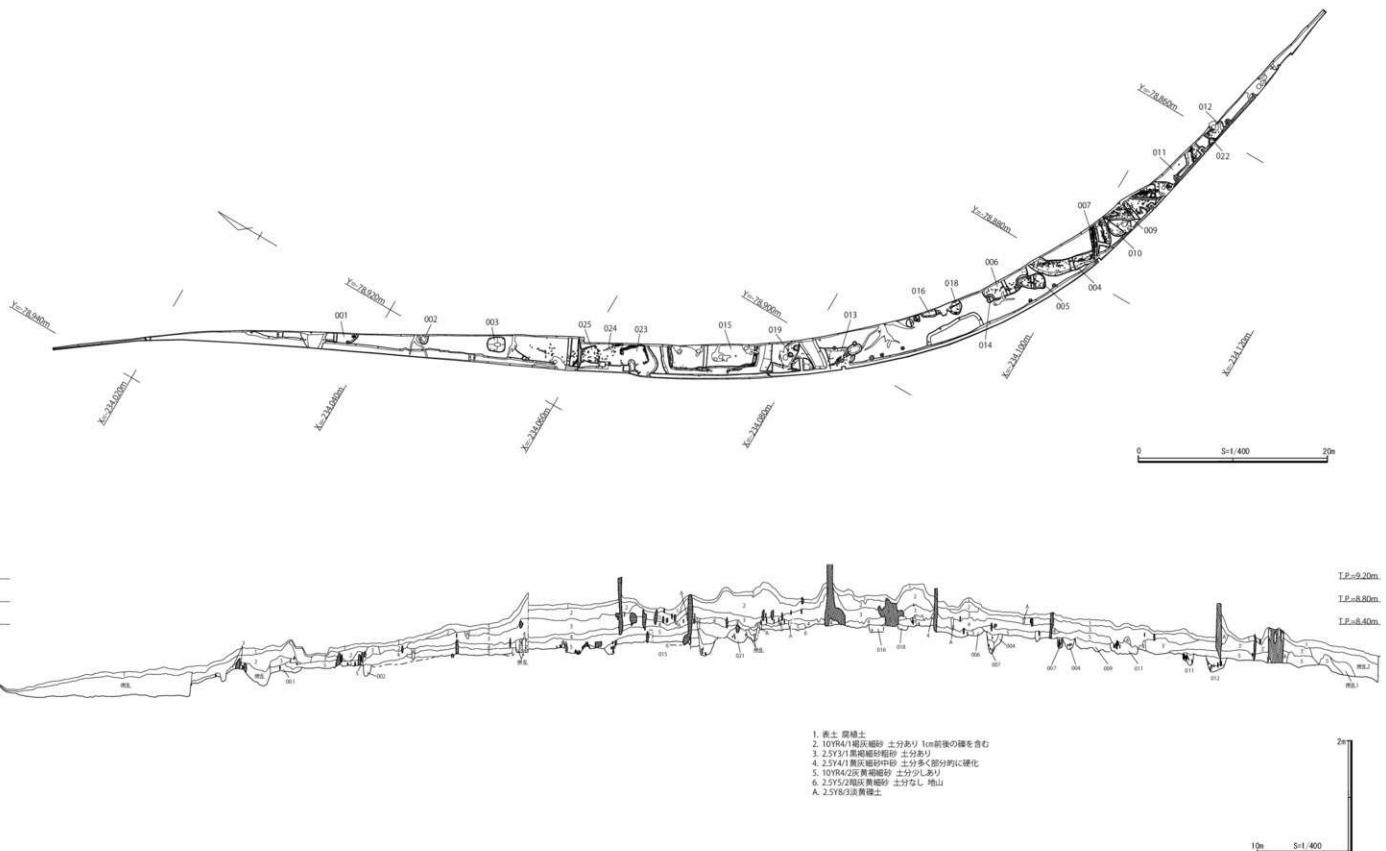


図5 調査区全体図・断面図

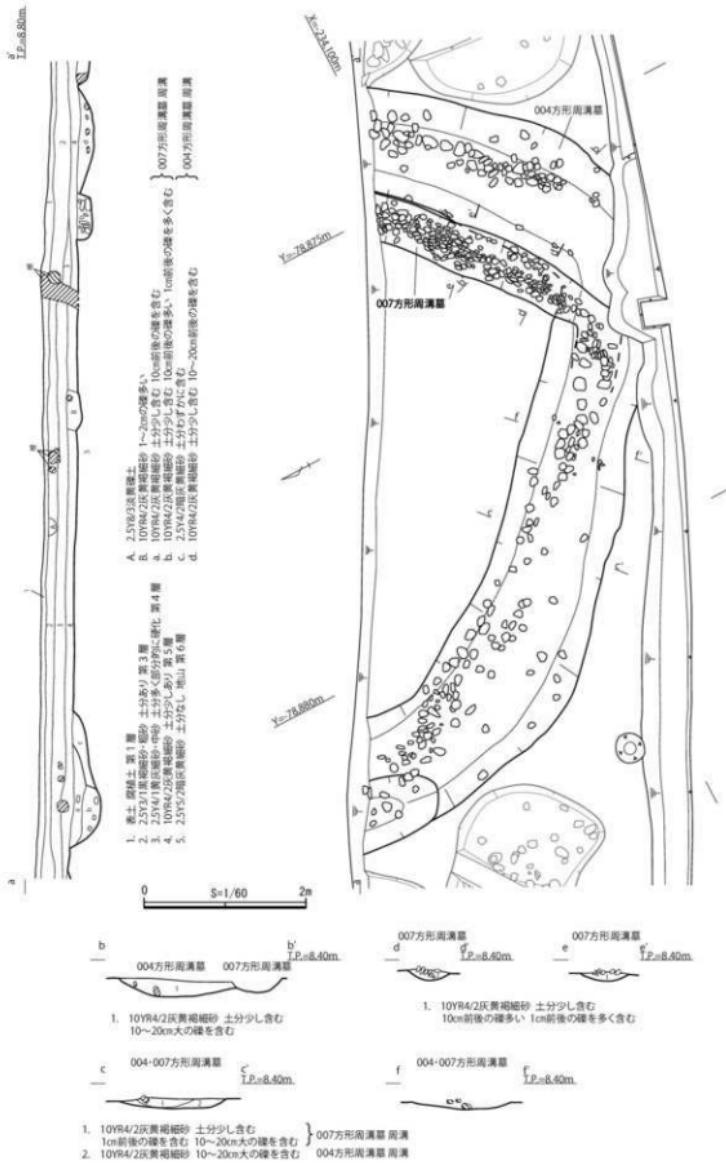


図6 004・007 方形周溝墓

溝部の土層断面を精査した結果、ほぼ同じ位置で重複していることが想定できた。規模は一辺6.20mで、周溝は幅約0.60m、深さ0.20mで、南辺のみ礫が密集する状態となっている。遺物は弥生時代中期の土器が出土しているが、先行する004方形周溝墓の遺物が混入したものと考えられる。遺構の時期は、011・015方形周溝墓などと同様に墳丘裾に礫を用いた構造物を持つことから、弥生時代後期末頃であると判断している。

011方形周溝墓（図7、図版4・8） 004方形周溝墓の南東側に位置し、重複する010土坑より新しい。コーナー付近は攢乱により削平され、更に調査区域外となるが、幅1.20~1.60

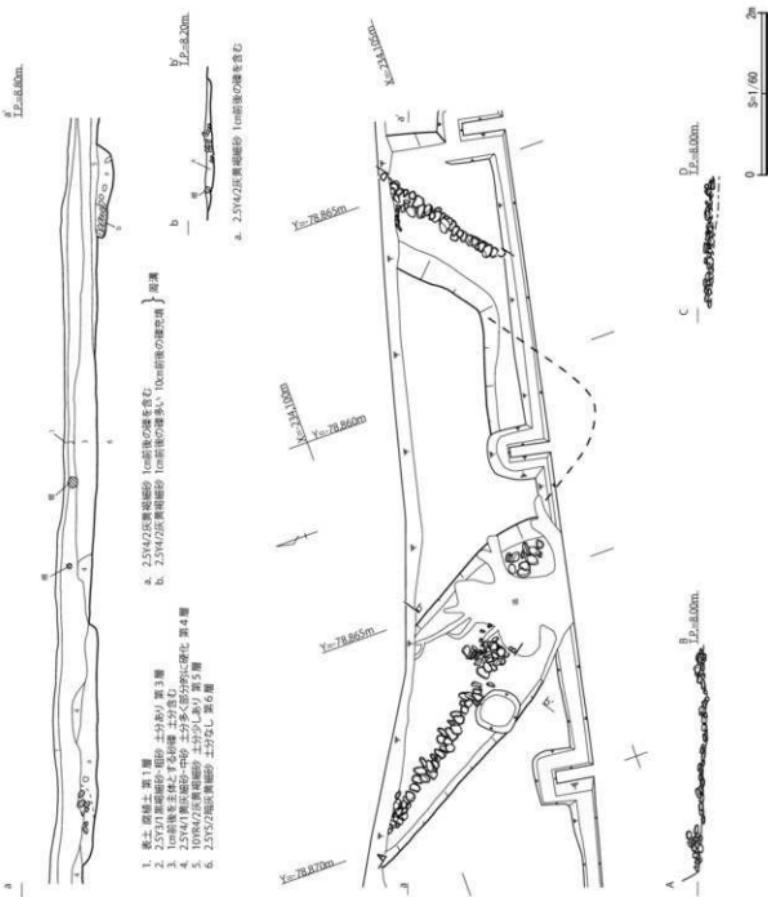


図7 011 方形周溝墓

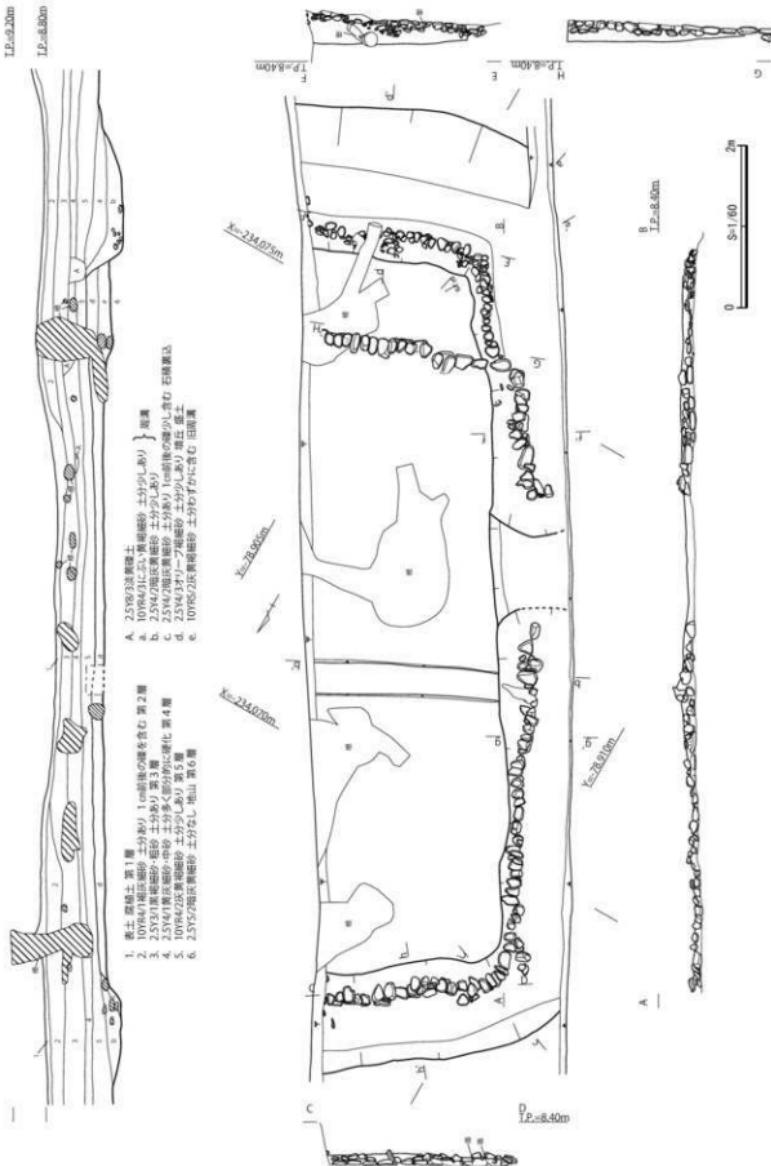


図8 015方形周溝墓(1)

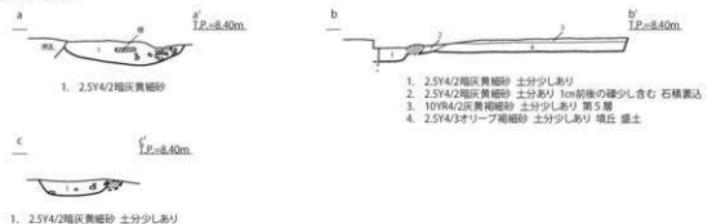
m、深さ0.20mの溝・石積みが直角に交差すると推定できることから方形周溝墓と判断した。南北の軸方向はN-30°-Wを指し、規模は不明であるが、北辺は6.00m以上に復元できる。溝内には10~20cmの礫が密集して出土し、明らかに元位置を動いた礫を除去すると、数段の石積みを検出することができた。遺物は弥生土器の細片が出土しているが、015方形周溝墓などと同様な構造であることから、弥生時代後期末から古墳時代初頭頃の遺構であると判断している。主体部は明らかでない。

015方形周溝墓（図8・9・14、巻頭図版、図版5・6・8・11） 004・011方形周溝墓などとは違い北西側に下る位置で検出した。南北の軸方向はN-30°-Wを指し、同じ軸方向で南側に拡張を行っている。最終的な規模は墳丘部の南北方向の一辺が9.00mで、周溝は幅1.00~1.90m、深さ約0.15~0.35mである。調査区が狭小なため、西側を中心に約1/3を検出したことになる。西辺の中央には陸橋部が存在したことが、礫の検出状況から想定できる。周溝内からは10~20cmの礫が多量に出土しており、多くは墳丘側から落ち込んだ状態となっていた。これらの礫を除去すると、墳丘基底部に沿うように数段分の石積みが確認でき、旧状としては墳丘裾に石積みを持ち、墳丘部に葺石（貼石）などの構造物があった可能性が考えられる。築造当初の規模は一辺8.60mで、使用された礫は当初の方がやや大振りとなっている。遺物は検出時あるいは周溝内から、弥生時代後期末頃の土器片が（4・5）出土している。墳丘部の断割りを行ったが主体部は確認できなかった。

023~025方形周溝墓（図10、巻頭図版、図版5・7） 015方形周溝墓の北西側で検出した。023方形周溝墓の南辺以外は溝部が明確でなく、礫が並ぶ状態から3基の方形周溝墓が重複していると判断した。

023方形周溝墓は、北西部が削平されるものの、調査区内で完結しており比較的全容が明らか

周溝断面土層図



周溝エレベーション図

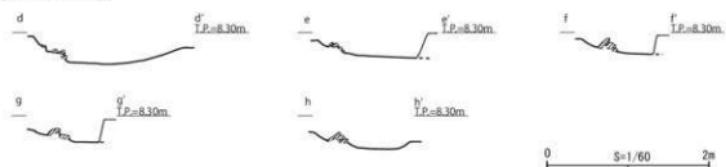


図9 015方形周溝墓（2）

023方形周溝墓



024 方形周溝墓

025方形周溝蓋

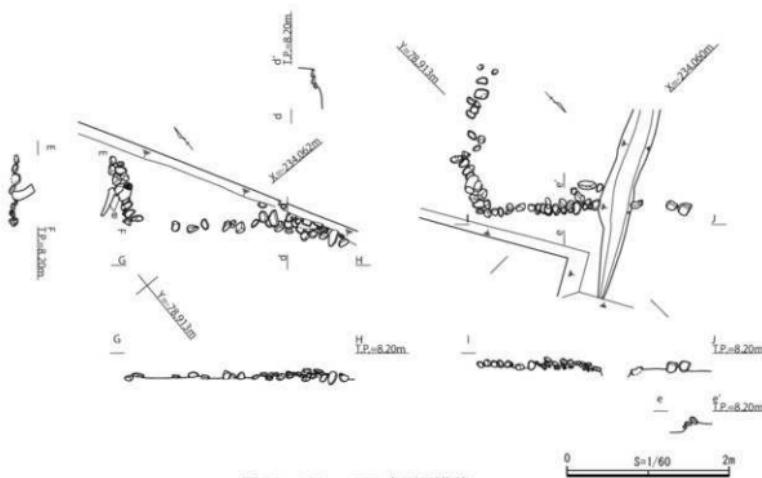


図10 023～025方形周溝墓

である。墳丘の軸方向は東西・南北軸に対して45度振っており、規模は南北2.30m、東西1.80mで、南辺の溝は幅0.50～1.00m、深さ0.10mである。墳丘裾には10～20cmの礫が重なっているが、015方形周溝墓のように規則正しい石積みをなすものでない。主体部は確認できていない。遺物は検出時に弥生時代後期末頃の土器片が出土している。

024方形周溝墓は、023方形周溝墓の北東部に接して位置する。周溝部は明確でないが、本来は溝部を共有する形態であったと考えられる。北西コーナー付近を検出したのみで、全容は明らかでないが、墳丘規模は南北2.00m、東西1.00mを確認している。軸方向は023方形周溝墓と同じで、墳丘裾には10～20cmの礫が重なっているが、023方形周溝墓と同様に規則正しい石積みをなすものでない。主体部は確認できておらず、遺物は検出時に弥生時代後期末頃の土器片が出土している。

025方形周溝墓は、024方形周溝墓の北西側に位置し、南東コーナーを付近で重複する。024方形周溝墓に先行すると考えられる。北西側は削平され、墳丘裾の礫もかなり抜き取られている。軸方向は023方形周溝墓と同じで、規模は南北2.50m、東西1.00mを確認している。主体部は確認できておらず、遺物は検出時に弥生時代後期末頃の土器片が出土している。

2. 土坑

調査区の北西端・南東端以外の各所で検出しているが、規模大小様々である。完形の土器を含む土坑もなく、周辺部で確認されている土壙墓の性格をもつか明らかでない。方形周溝墓の溝部と同様に、10～20cmの礫を多く含む土坑も確認している。

002土坑（図11、図版9） 調査区の北西側で検出した土坑で、東側が調査区域外となり、全容は明らかでないが、平面形状は楕円形を呈するものと考えられる。規模は長さ0.80m以上、幅0.90m、深さ0.15mである。断面形状は船底状を呈し、埋土は1層である。遺物は出土していない。

003土坑（図11、図版9） 調査の北西側で検出した土坑で、002土坑の南に位置する。調査区内でほぼ全容が明らかになっており、平面形状は隅丸方形を呈する。規模は長さ1.90m、幅1.55m、深さ0.27mである。断面形状は船底状を呈し、遺物は弥生土器の細片が出土している。

005・006・014土坑（図11、図版3） 調査区の南東側で検出した大小の土坑で、004方形周溝墓の北隣に位置する。重複する土坑は、006土坑が先行し、005・014土坑が後出する。

006土坑は北東側が調査区域外となり、調査区内では楕円形を半裁した形状で検出している。規模は長さ5.30m、幅1.70m以上で、深さは0.15mである。断面形状は船底状で、埋土には10～20cmの礫が含まれる。遺物は出土していない。

005土坑は006土坑の南側で重複する。平面形状は楕円形で、規模は長さ2.85m、幅1.55m、深さ0.10mである。断面形状は楕円形で、006土坑と同様に埋土には10～20cmの礫が多く含まれる。遺物は出土していない。

014土坑は006土坑の北側で重複する。平面形状は円形で、規模は直径0.60m、深さ0.10mである。断面形状は船底状で、遺物は出土しない。

009・010土坑（図12・14、図版4・11） 調査区の南東側で検出した土坑で、004方形周溝墓と011方形周溝墓の間で検出した。009土坑は重複する011方形周溝墓に先行し、010土坑は

009土坑と重複して、それより古い。

009土坑は011方形周溝墓と重複して全容は明らかでないが、規模が大きい土坑で、長さ4.00m以上、幅2.50m以上、深さ0.10mである。断面形状は船底状で、埋土からは10~20cm程度の多くの礫が含まれる。遺物は中期の弥生土器が出土している。

010土坑は009土坑と重複して全容は明らかでないが、平面形状は円形であったと考えられる。規模は直径約2.40m、深さ0.15mである。断面形状は船底状で、埋土には009土坑と同様に10~20cmの礫が多く含まれる。遺物は弥生時代中期の壺（6）などが出土している。

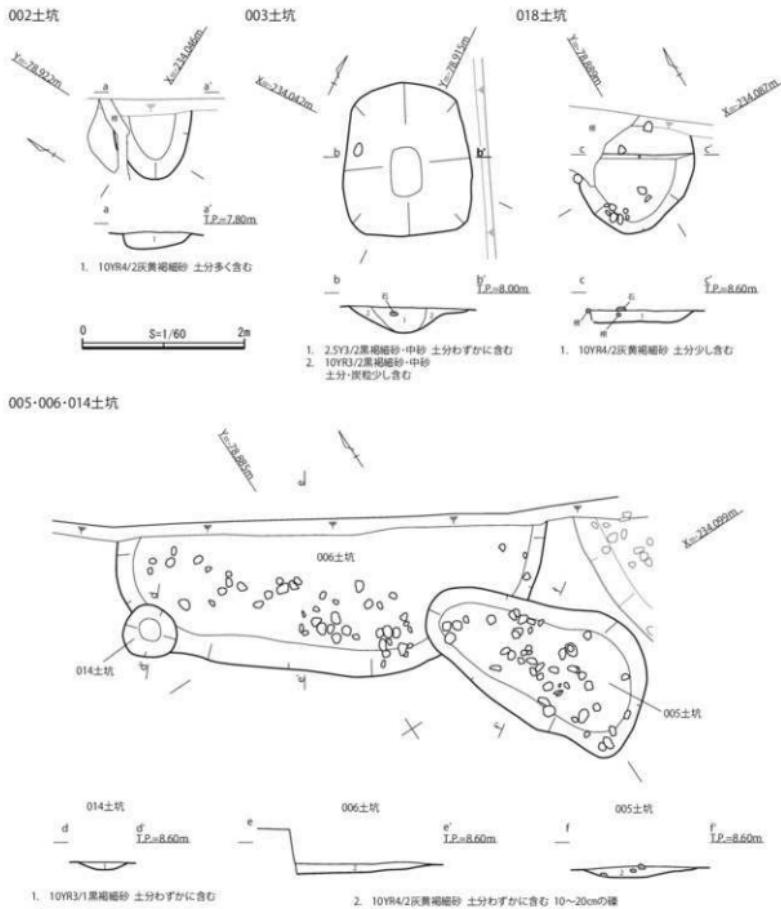
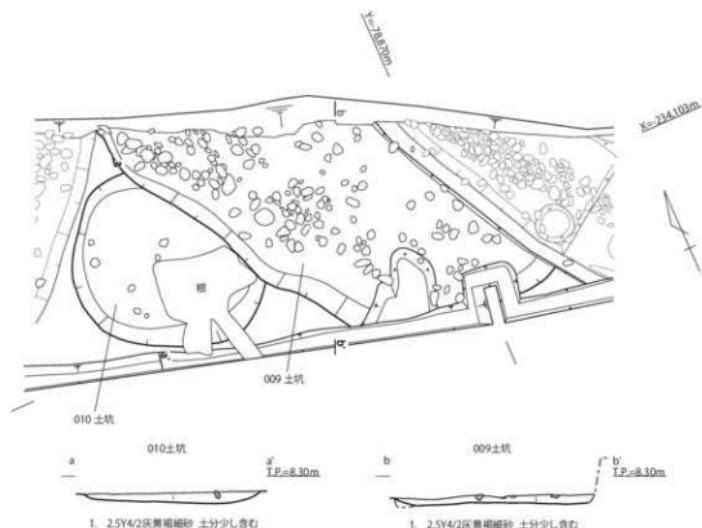


図11 遺構図（土坑）1

009・010 土坑



012・022土坑



013土坑

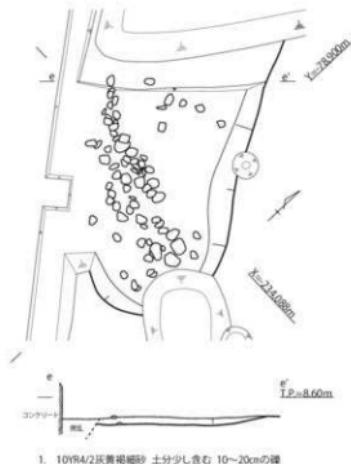


図 12 遺構図（土坑）2

0 S=1/60 2m

012・022土坑（図12・14、図版9・11） 調査区の南東端近くで検出した土坑で、011方形周溝墓の南側に位置する。重複する土坑は、022土坑が先行して、012土坑が後出する。

012土坑は東西が調査区域外となり、全容が明らかでない。平面形状は不整形で、規模は長さ2.30m、幅1.20m以上、深さ0.30mである。断面形状は船底状で、埋土には10~20cm程度の礫が多く含まれる。遺物は弥生土器壺などが出土するが、その一部は本来022土坑に帰属するものと考えられる。

022土坑は西側が調査区域外となり、全容不明であるが、調査区内で半円形の形状で検出している。規模は長さ0.60m以上、幅0.80m、深さ0.32mである。断面形状は擂鉢状で、埋土には10~20cm程度の礫が含まれる。遺物は弥生土器壺（8）などが出土している。

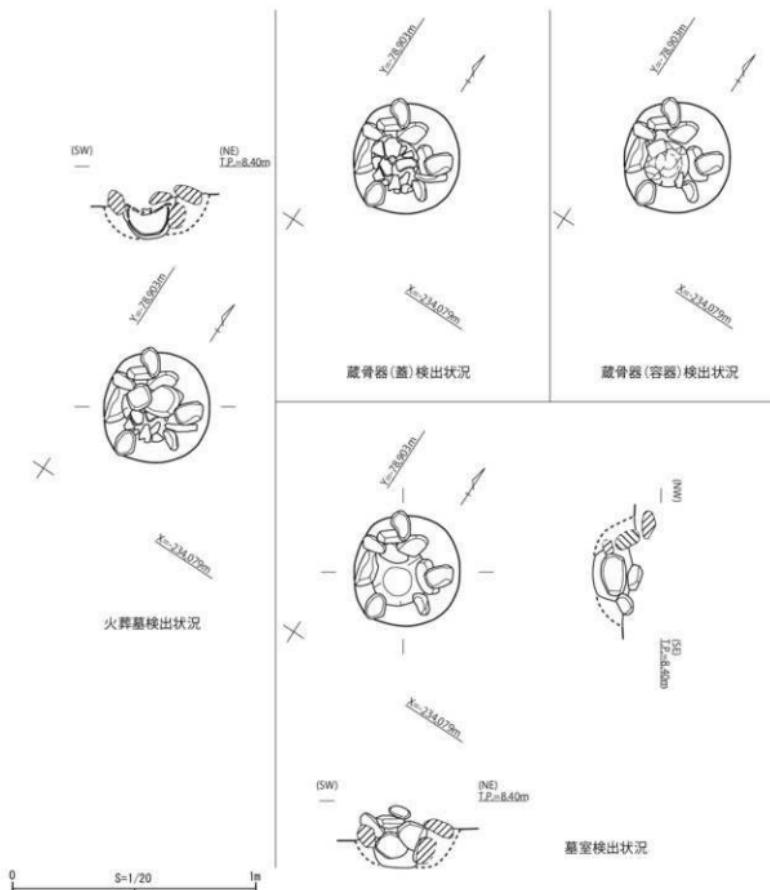


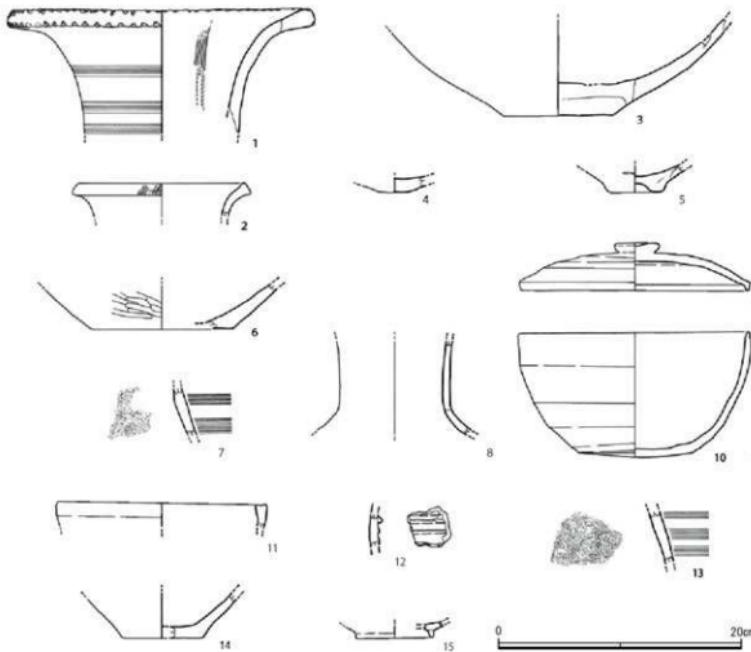
図13 019火葬墓

013土坑（図12・14、図版9・11） 調査区の中央付近で検出した土坑で、北側を攪乱により削平され、西側が調査区域外となるため全容は明らかでない。規模は長さ3.10m以上、幅2.30m以上、深さ0.15mである。断面形状は船底状で、埋土には10~20cm程度の礫が含まれる。検出した礫は列をなしているように見えることから、方形周溝墓の一部を検出している可能性もある。遺物は弥生土器壺（7）が出土している。

018土坑（図11） 調査区の中央南寄りで検出した土坑で、東側が調査区域外となり、また松の根株などで全容は明らかでない。規模は長さ1.40m以上、幅1.35m以上、深さ0.15mである。断面形状は船底状で、埋土には10~20cm程度の礫が含まれる。遺物は出土していない。

3. 火葬墓

019火葬墓（図13・14、図版9・11） 調査区の中央付近、015方形周溝墓の南側で検出した。藏骨器として須恵器鉢（10）・环蓋（9）を用いたもので、10~20cmの円礫を組み合わせた縦横0.2m、深さ0.2mの小石室に骨灰が多く含む砂を充填した藏骨器を置いていた。藏骨器の上は、10~20cmの礫で覆われていた。須恵器の時期から、奈良時代前半代の遺構であると考えられる。



1~3: 004方形周溝墓、4・5: 015方形周溝墓、6: 010土坑、7: 013土坑、8: 022土坑、
9・10: 019火葬墓、11~15: 攪乱・包含層等

図14 出土遺物

第5章　まとめ

第1節　砂丘上の墓地

海岸砂丘上に立地する吉原遺跡では、最初の発掘調査が行われた昭和62年以前にも工事などに伴って弥生土器や須恵器などが発見されていた。これらの土器は単独で確認され、石器などが伴わないことから、墓に副葬された土器であると評価されていた。同じ砂丘上には、和田古墳群や本の脇古墳群があるなど、少なくとも古墳時代には砂丘上が墓地として利用されていることが明らかになっていた。また、周知の遺跡にはなっていないが大正12年に刊行された「日高郡誌」には吉原古墳の紹介もあり、記載された番地からもそれが吉原遺跡の範囲内に相当することが窺える。

一方、日高川流域以南のみなべ町や田辺市の海浜部に形成された砂丘上でも同様に弥生土器や須恵器などが単独で出土する例が、早い段階から報告されており、砂丘上に立地する古墳群の存在も知られていた。昭和52年以降に実施されたみなべ町片山遺跡の数次にわたる発掘調査で、弥生時代前期から古墳時代にかけての土器を副葬する土壙墓や方形周溝墓が多く確認され、砂丘

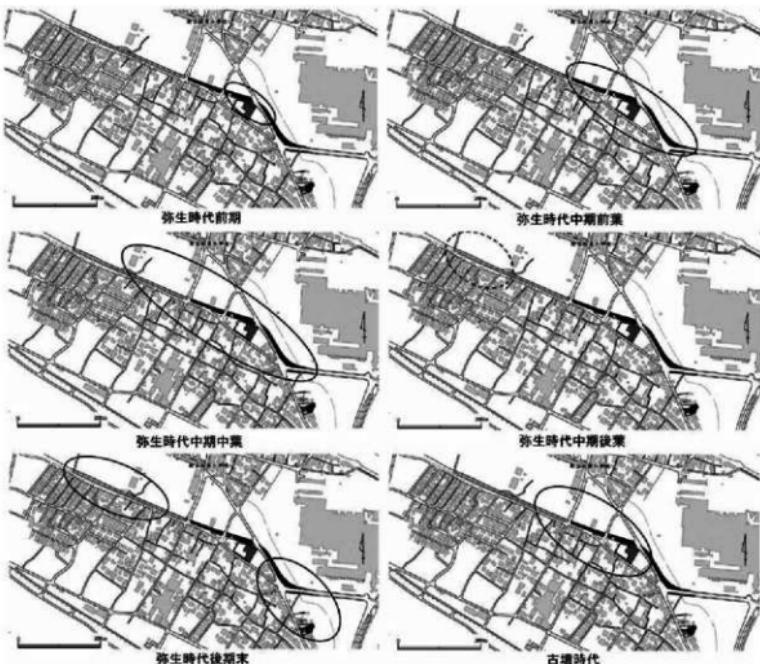


図15　吉原遺跡の墓域の変遷図

上で単独出土する土器が墓に伴うものであることが明確となった。その後、吉原遺跡や田辺市田辺城下町遺跡の発掘調査でも土器を副葬した土塙墓などが確認されるようになった。

吉原遺跡は砂丘稜線に沿って長く展開し、これまでの発掘調査によって、弥生時代から近世にかけての墓地として周知されている。詳細にみると時代・時期によって墓域が移動していることが窺え、同様なことは片山遺跡でも確認されている。吉原遺跡が墓域となるのは弥生時代前期頃で、当地域で弥生時代前期の遠賀川式土器に共伴する瀬戸タイプの突帯文土器が、遺跡南東端付近の今回の調査区周辺で確認されている。砂丘上の墓地の始まりは、やはり瀬戸タイプの突帯文土器や遠賀川式土器が出土している片山遺跡とほぼ同時期であることが窺える。吉原遺跡では、中期前葉から中期中葉にかけて、墓域は北西側に拡張しており、中期後葉は遺跡の北西側に墓域を移している。後期前葉から中葉にかけて吉原遺跡では造墓活動はみられず、弥生時代後期末頃から古墳時代初頭にかけて再び墓域として使用されるようになる。この消長は高地性集落の出現や平野部の集落の盛衰にも連動している。再開した時期の土塙墓などは、遺跡の南東部と北西部にやや距離を空けて営まれている。古墳時代の遺構は遺跡中央部に多く、古代以降の遺構・遺物についても遺跡全体に分布するようになる。



写真11 平成28年度調査029列石状遺構

第2節 方形周溝墓

吉原遺跡の方形周溝墓は中期前葉あるいは中葉から築かれる。昭和63年の7区SX-001と今回の004方形周溝墓であるが、県内においても古い例とすることができます。弥生時代後期末から古墳時代初頭の方形周溝墓は昭和63年調査の7区で3基、今回の調査で6基確認されている。北西側に位置する前者は方形区画に単純に溝を巡らしたもので、南東側の後者については墳丘裾に石積みを有している。また、平成28年度調査で確認された029列石状遺構（墳丘部3.2m×2.0m）や、平成29年度にその隣接地の工事立会で確認された列石状遺構も今回の調査で検出した



写真12 昭和63年度調査SX-002



写真13 昭和63年度調査SX-003

方形周溝墓と同様であり、遺跡南東部を中心には墳丘裾に石積みをもつ方形周溝墓が展開していた可能性が高い。墳丘部や墳丘裾に石積みや葺石（貼石）などの石の構造物をもつ方形周溝墓は県内では確認されておらず、石を用いた構造のものを求めるに近畿北部や山陰地方に分布する方形貼石墓や四隅突出型墳丘墓などがあり、関連が注目される。同じ遺跡内で少し距離を隔てるものの、構造の違う方形周溝墓群が存在することは、それぞれ違う集団によって造営されていることの証左であり、畿内地域と同様な方形周溝墓を築く集団と近畿北部や山陰地方などと繋がりがある集団が存在したと捉えることもできる。石積みをもつ方形周溝墓の発見は当地域の墓制や地域間交流を考えるうえで貴重な資料を提示したと言える。

なお、方形周溝墓からの遺物の出土は極端に少ない傾向にある。これは石積みを持つ今回検出した方形周溝墓に限らず、以前の調査で確認されている例の方形周溝墓でも同様なことが言える。また、この傾向は同時期に併行する尾ノ崎遺跡の方形周溝墓群でも言えることで、10数基確認されているものの、残りの良い主体部からの出土以外は、遺物量は極端に少ない。

石積みに使用されている礫は、扁平で大きさも10～20cmのものが主を占める。これは直近の煙樹ヶ浜から採取されたもので、容易に手に入れることができる。また、海岸の石は波のローリングを受けて一様に扁平を呈することから、意図的に扁平な礫を選んだとは言えない。これらの礫は日高川上流から海まで運ばれ、海岸に打ち上げられたもので、学術的には日高川層群の龍神層・美山層の砂岩および頁岩が主体となっている。

第3節 火葬墓

日高平野周辺部で古代の火葬墓は、吉原遺跡のほか日高川町の道成寺周辺で確認されているのをはじめ、日高川左岸では、中村地区遺跡と祓戸古墳群で火葬墓の可能性がある遺構や遺物が確認されている。国内で最初に火葬された人物は、奈良興福寺の僧侶であった道昭で、これが文武天皇4年（700年）のこととされる。当初の火葬は皇族や僧侶・官人など上層階級に限られることから、道成寺周辺で確認されている火葬墓については、寺の僧侶のものであった可能性も考えられる。吉原遺跡ではこれまで古代の火葬墓と考えられる遺構は確認されているものの、明確なものではなかった。今回の調査では火葬が始まって間もない奈良時代前期の火葬墓が確認された。先述したように堅田遺跡では奈良時代前半代の郡衙跡が確認されており、ほど近い位置にある吉原遺跡の火葬墓については、役所の官人に関わるものである可能性がある。

第4節 松原経塚

調査では松原経塚に関わる遺構は検出できなかった。確かに松原王子神社が遺跡と隣接し、熊野参詣道も近くを通過することから、経塚の立地条件が整っている。ただ、松原経塚から出土した遺物は平安時代の須恵器碗と和鏡で、外部施設の報告もなく、経塚で普遍的に出土する経筒



図16 吉原遺跡の方形周溝墓

をはじめ、経塚特有の青白磁の合子なども出土していない。古代から中世の墓に土器や鏡を埋納する例があることからも、松原経塚についても墓であった可能性も考えておきたい。

参考文献

- ・『吉原遺跡一県道柏・御坊線改良工事に伴う発掘調査報告書』財団法人和歌山県文化財センター1990年3月
- ・『吉原遺跡一都市防災総合推進事業に伴う発掘調査報告書』公益財団法人和歌山県文化財センター2017年年2月
- ・『吉原遺跡一新浜集会場新築工事に伴う発掘調査報告書』公益財団法人和歌山県文化財センター2021年3月
- ・「24 吉原遺跡」『和歌山県埋蔵文化財調査年報一平成29年度一』和歌山県教育委員会2019年3月
- ・『日高郡誌下巻』日高郡役所編1970年(大正12年刊の複製)
- ・「156 吉原経塚」「和歌山県史・考古資料』和歌山県史編纂委員会編1983年2月 *吉原経塚は松原経塚と同一
- ・肥後弘幸「方形貼石墓概論」『京都府埋蔵文化財論集 第6集』京都府埋蔵文化財調査研究センター2010年

表1 出土遺物観察表

法量の()内は復元した大きさ +はそれ以上。色調の内・外・断は「面」を省略している。

| 報告 番号 | 格別 埋蔵 状況 | 地区 | 遺構 部位 | 技法・調理 | | | 埋存率 | 柱芯調整 | 色 調 | 地 士 | 備 考 |
|----------|----------------|--------------|--------------|--------|-------|------------|------------|--|--|-----------------------------------|------------------|
| | | | | 口縁部 | 周辺 | 底面 | | | | | |
| 1. | 生土層 否 | J9s1 ほか | 004ほか | (24.2) | 10.1+ | - | 口縁部 30% | 口縁部外方に面をもち、上下端にキザ目 外面部側に織目縞文、手以上、内面底方向 に織目縞文を複数方向に | 内:2SYR7/6(幅) 外:2SYR7/4に(底) 底:2SYR8/4(底真) | 白 2.5cm以下のチ ート白色砂利を多 く含む | 反転慶元 中頃 |
| 2. | 生土層 否 | J9t1 | 004 | (13.5) | 2.7+ | - | 口縁部 7% | 口縁部側壁状工持によるキザミ 内外底コ ナデ | 内:10YR8/4に(底真) 外:7SYR6/4に(底) 底:10YR8/3 外:7SYR6/4に(底) | やや白 1.5cm以 下的チートを少 々含む | 反転慶元 中頃 |
| 3. | 生土層 否 | J9t1 | 004ほか | - | 7.9+ | (6.9) | 底面 40% | 外唇+ラミガミ# 内面摩滅により調査不明 | 内:10YR7/3に(底真) 外:7SYR7/3に(底) 底:NA/0 外:7SYR7/3に(底) | 2mm以下の白色砂 利を多量含む | 反転慶元 中頃 |
| 4. | 生土層 否 | K5 | 015付近 排水中 | - | 1.3+ | 2.5 | 底面 100% | 内外面摩滅のため調査不規 | 内:NA/0(底真) 外:10YR7/3に(底) 底:NA/0 外:7SYR7/3に(底) | 褐色 | 一部反転元 後期末 |
| 5. | 生土層 無 | K8e16 | 015- 排水中 | - | 2.2+ | (4.5) | 底面 70% | 外唇ナデ+平行タクナ# 内面摩滅により調 査不規 | 内:2SYR7/4に(底) 外:10YR7/4に(底) 底:7SYR7/3に(底) 外:7SYR7/4に(底) | 0.5cm以下の白 色砂利を多量含む | 反転慶元 後期末 |
| 6. | 生土層 否 | J9s1 | 010 | - | 3.7+ | (11.0) | 底面 10% | 外唇ヨコナデ+ヘラミガミ 内面摩滅により 調査不規 | 内:10YR7/1に(底真) 外:7SYR6/4に(底) 底:7SYR6/4に(底) | 白 2mm以下のチ ートを多量含む | 反転慶元 中頃 |
| 7. | 生土層 否 | K8a21 | 013 | - | 3.9+ | - | 縦断 5% | 織目縞文2枚以上 | 内:2SYR7/3に(底真) 外:7SYR7/4に(底) 底:7SYR7/2 明治期 | 1.5cm以下のチ ートを多量含む | 中頃 |
| 8. | 生土層 否 | J9s2 | 022 ほか | - | 7.7+ | - | 縦断 35% | 外唇+ラミガミ# ヨコナデ+ナデ 内面摩滅 により調査不規 | 内:10YR7/2に(底真) 外:10YR7/4に(底) 底:5YR6/6(底) 外:10YR7/4に(底) | 白 2mm以下のチ ート白色砂利を多 く含む | 反転慶元 中頃 |
| 9. | 須磨層 否 | K8a20 | 019- | 18.4 | 4.0 | 縦み深 3.7 | 95% | 外唇ヨコナデ+回転ヘラグゼ# 内面回転ナ ド+ナデ | 内:10YR7/3に(底真) 底:10YR8/1(底) | 白 3mm以上の白色 砂利を多量含む | 大判素 織目 縞文 南朝時 |
| 10. | 須磨層 無 | K8a20 | 019 | 18.6 | 10.3 | 9.2 | 100% | 内面回転ナデ+下位のナデナデ# 外唇底 部に回転ナデ# 下位から底面回転ヘラグゼ リ | 内:10YR8/1(底白) 外:10YR6/2(底真 底:10YR8/1(底) | 白 1mm以下の白色 砂利を多量含む | 大判素 織目 縞文 南朝時 |
| 11. | 生土層 否 | J9v25 | 難凡 | (16.8) | 2.0+ | - | 口縁部 8% | 内外ヨコナデ | 内:7.5YR6/3に(底) 外:10YR6/1(底 底:7.5YR6/3に(底) | 白 1mm以上の白色 砂利を多量含む | 反転慶元 中頃 |
| 12. | 生土層 否 | K8d14 e14 | 包帯部など | - | 2.7+ | - | 縦断 5%以下 | 縦断貼付突起3束以上 | 内:外:10YR7/3に(底真) | やや白 1.5cm以 下的チートを多 量含む | 中頃 |
| 13. | 生土層 否 | J9v25 | 四角型 | - | 4.4+ | - | 体形 5%以下 | 織目縞文3束以上 | 内:10YR7/4に(底真) 外:7SYR6/4に(底) 底:10YR6/1 底:灰 | 白 1mm以下の白色 砂利を多量含む | 中頃 |
| 14. | 生土層 否 | K8c17 | 包帯類 | - | 3.8+ | (6.0) | 底面 20% | 内外面摩滅のため調査不規 | 内:10YR6/2(底真) 外:10YR7/4 底:10YR6/1(底 底:10YR7/3に(底) | 白 2mm以下のチ ート白色砂利を多 く含む | 反転慶元 中頃 |
| 15. | 黑色土層 無 | K8a21 | 表土・複合 | - | 1.3+ | (6.1) | 高台部 5% | 外唇ヨコナデ 内面ナデ | 内:NA/0(底) 外:5YR7/3に(底) 底:5YR8/1(底) | 白 0.5cm以下の 白色砂利を多量 含む | 反転慶元 A類 平安時代 |

付章 吉原遺跡・松原経塚で出土した人骨

丸山真史（東海大学人文学部）

019号遺構で出土した土器の内部から人骨が出土しており、破損した土器の周辺散乱した状態の人骨も僅かにある。いずれも細片となっており、白色を呈することが特徴である。一般的に考古遺跡から出土する骨は、周辺土壤の影響によって褐色などを呈する。一方、白色を呈する骨は変色している可能性が高く、長時間の高熱に晒されたためと考えられる。すなわち出土した土器は藏骨器であり、被熱して細片化した人骨を内部に納めていることから、火葬墓であると考えられる。

人骨を含む土器や周辺の骨灰は（公財）和歌山県文化財センターに持ち帰り、肉眼で確認できる骨は全て抽出している。それにも関わらず、歯は破片すら含まれていない。藏骨器をしている土器は、全身の骨格部位が納まる法量ではなく、部分的な納骨であったと考えられる。

人骨のうち頭蓋骨や四肢骨には2cm以上の破片もあるが、大部分がそれ以下の細片となっており、部位を特定できる破片は極めて少ない。部位が判明したものは頭蓋骨、肋骨、鎖骨である。性別は判明しないが、頭蓋骨はやや薄く、縫合部が保存されているものがあることから、青年段階と推定される。また、明確に動物骨と特定できる骨片は認められないことから、火葬人骨のみで混入はないと考えられる。

謝辞 本資料の分類・同定には、東海大学人文学部の日下宗一郎氏の助言をいただいた。末筆ではあるが、ここに記して感謝の意を表する。



写真14 火葬人骨

報告書抄録

| ふりがな | よしはらいせき、まつばらきょうづか | | | | | | | |
|-------------------|--|-------|----------|-------------------|--------------------|-------------------------------|------------------------|---------------|
| 書名 | 吉原遺跡、松原経塚 | | | | | | | |
| 副書名 | 柏御坊線交通安全施設等整備事業に伴う発掘調査報告書 | | | | | | | |
| 編著者名 | 川崎雅史、丸山真史 | | | | | | | |
| 編集機関 | 公益財團法人 和歌山県文化財センター | | | | | | | |
| 所在地 | 〒 640-8301 和歌山市岩橋 1263 番地の 1 TEL 073-472-3710 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦 2024 年 3 月 8 日 | | | | | | | |
| 所収遺跡名 | 所在地 | コード | | 北緯 ° ′ ″ | 東經 ° ′ ″ | 調査期間 | 調査面積 m ² | 調査原因 |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| よしはらいせき 吉原遺跡 | わかやまけん 和歌山県 ひだかぐん 日高郡 あさぎりちょう 美浜町 よしはら 吉原 | 30381 | 010 | 33° 53' 12" | 135° 08' 49" | 2022.11.14 ～ 2023.03.14 | 369.6 | 道路安全施設 等整備 |
| まつばらきょうづか 松原経塚 | | | 012 | 33° 53' 11" | 135° 08' 52" | | | |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | | 特記事項 | | |
| 吉原遺跡 | 散布地 | 弥生時代 | 方形周溝墓、土坑 | 弥生土器 | | 石積みをもつ方形周溝墓 | | |
| | | 奈良時代 | 火葬墓 | 須恵器 | | 小石室内に骨灰を充填した須恵器鉢・蓋を埋納 | | |
| 松原経塚 | 経塚 | — | — | — | | — | | |
| 要約 | 吉原遺跡は砂丘上に位置する弥生時代から近世にかけての墓地で、これまで約 4700 m ² が調査されている。県道の安全施設整備事業に伴う今回の調査によって弥生時代の方形周溝墓 7 基・土坑や奈良時代の火葬墓 1 基を確認した。方形周溝墓は中期に帰属するものが 1 基、後期末頃に帰属する方形周溝墓が 6 基である。後期末頃の方形周溝墓は埴丘墓に石積みをもつなど、和歌山県内では類例がない構造である。埴丘に石列・貼石などをもつ埴丘墓には、近畿北部の方形貼石墓や山陰地方の四隅突出型埴丘墓があり、関連が注目される。吉原遺跡では、既往の調査で弥生時代後期末の石を用いない通有の方形周溝墓も確認されており、同じ遺跡内で形態の違う方形周溝墓が造営されていることになる。このことは周辺地域と同様的な方形周溝墓を築く集団と近畿北部や山陰地方などと繋がりがある集団が存在したと捉えることができる。石積みをもつ方形周溝墓の発見は当地域の墓制や地域間交流を考えるうえで貴重な資料を提示したと言える。 | | | | | | | |



調査区全景（上空から）

図版 2



1. 調査区近景（南西上空から）



2. 調査区南東部の遺構（上空から）



1. 004・007 方形周溝墓、005 土坑（北東から）



2. 004 方形周溝墓、005・006 土坑（北西から）

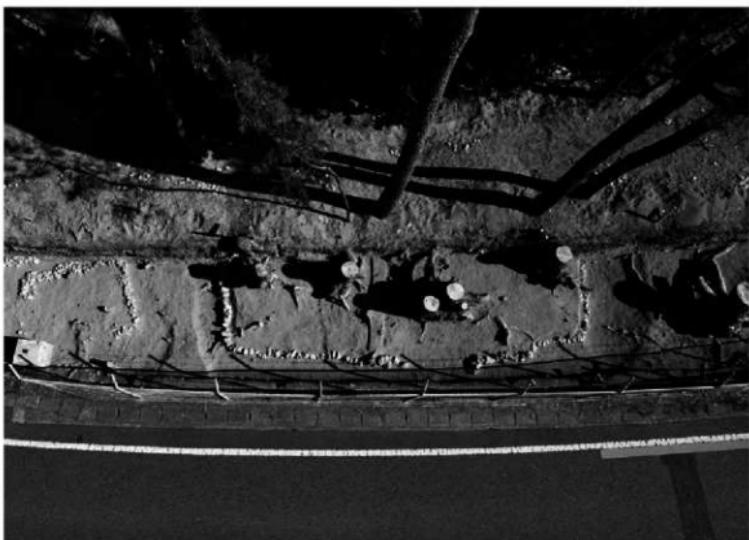
図版 4



1. 009・010 土坑（北から）



2. 011 方形周溝墓（西から）



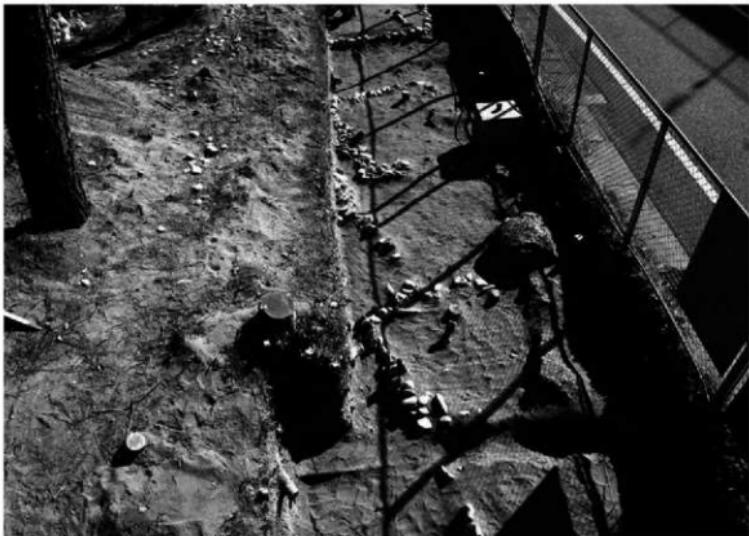
1. 015 方形周溝墓（上空から）



2. 015・023 方形周溝墓（北西から）



015 方形周溝墓（北西から）



1. 023～025 方形周溝墓（北西から）



2. 023 方形周溝墓（北東から）

図版8



1. 004・007 方形周溝墓周溝部断面（南西から）



2. 004・007 方形周溝墓周溝部断面（北西から）



3. 004・007 方形周溝墓周溝部断面（南西から）



4. 011 方形周溝墓南西部（南西から）



5. 011 方形周溝墓南東部（南西から）



6. 015 方形周溝墓当初の石積み（南から）



7. 015 方形周溝墓北辺部石積み（北から）



8. 015 方形周溝墓北辺部落石状況（南西から）



1. 002・003 土坑（上空から、上が北東）



2. 013 土坑（上空から、上が南西）



3. 012 土坑（南西から）



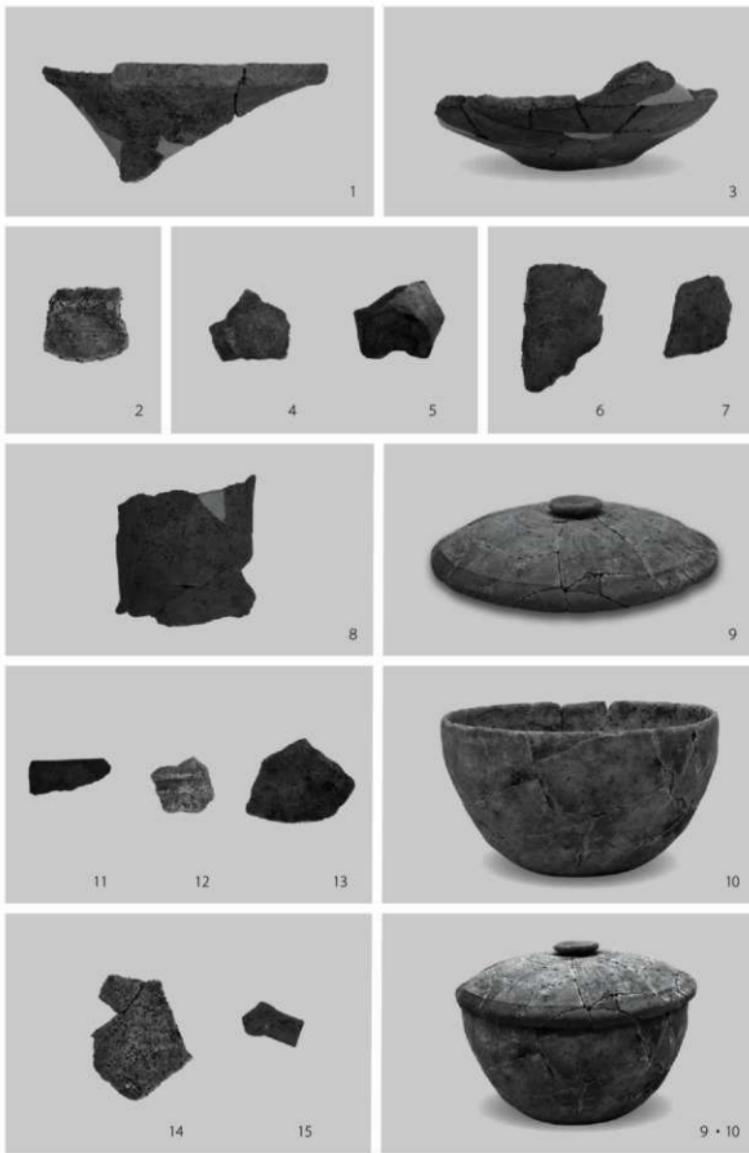
4. 019 火葬墓 検出状況（南東から）



5. 019 火葬墓 藏骨器検出状況（南東から）

図版 10





出土遺物

吉原遺跡、松原経塚

—柏御坊線交通安全施設等整備事業に伴う発掘調査報告書—

2024年3月8日

編集・発行：公益財団法人和歌山県文化財センター
和歌山県和歌山市岩橋 1263 番地の 1

印刷・製本：白光印刷株式会社
和歌山県和歌山市雜賀崎 2021-3

